

24 コロナ禍における繋がり支援の考察

～矯正施設を退所した独居者の語りをもとにして～

- 前阪 千賀子（大阪府地域生活定着支援センター）
- 安田 恵美（國學院大學）
- 山田 真紀子（大阪府地域生活定着支援センター）
- 小川 多雅之（大阪府地域生活定着支援センター）

【研究目的】

本研究の目的は、矯正施設を退所した高齢または障がいを抱える独居者のコロナ禍での過ごし方を、人との繋がり重点を当てて明らかにすることである。コロナ禍のひとりぐらしの実態を把握し、且つ人との繋がりが必要とする人を孤立させないための糸口を本研究によって考察する。

【研究の必要性】

私たちが所属する地域生活定着支援センター（以下、定着センター）は、平成21年度に始まった厚生労働省による地域生活定着促進事業を担い、刑務所や少年院（以下、矯正施設）を退所する高齢者や障がい者が、出所後引き受ける人も帰れる住まいもなく、客観的に福祉的支援の必要性があり、本人もそれに同意した場合、矯正施設や保護観察所に選定されて、定着センターの支援に繋がる仕組みがある。これを特別調整という。

本事業に関わる中で、特別調整対象者には再犯を繰り返し人生の大半が刑務所生活という人も多く、彼らは人との繋がり脆弱でコミュニケーションが苦手な人が多いと私たちは感じてきた。また、支援を通じて長く関わっていくなかで、どんな困難に直面しても言語能力や見栄などが邪魔をしてSOSを発信できない人が多いことも見えてくる。それゆえに、彼らの支援には対面での対話を通した繋がり構築がなくてはならないものだと考えている。

しかしながら、昨今のコロナ禍による社会情勢により、外出自粛や社会的距離など彼らに必要な支援とは真逆の事態が生じている。

本研究では、独居生活者の孤独感の高まりと各種サービスへのアクセス状況に着目して実態を解明する。「新しい生活様式」が求められる緊急事態の最中だからこそ、改めて人の繋がり支援のあり方について問い直すという本研究には意義がある。

【研究計画】

本研究では、当事者が地域で安定した独居生活を送ることができていたことを理由に、すでに定着センターの支援を終了している、且つインフォームドコンセンートのうえ研究協力に同意を得ら

れた6名を研究対象者とした。インタビューは研究対象者に定着センター事務所を訪問してもらい、本研究の目的である「コロナ禍における人との繋がり」に焦点をあてて45分から60分程度の半構造化面接で行った(12月～4月)。分析は、インタビューの逐語録をもとに質的分析を行った(5月～6月)。加えて、独居生活を送る研究対象者をより深く分析するために、ひとりぐらしと対照的な施設ぐらしの矯正施設出所者とその支援者にも研究協力を依頼して、公開座談会でグループインタビューを実施、両者のデータの比較検討を行った。この公開座談会では、上述のひとりぐらし調査の報告会も兼ねて実施したものである(7月31日)。これらの調査・分析から示唆されたことをもとに、報告書を作成した(8月)。

なお、本研究は、國學院大學における「人を対象とする研究に関する倫理委員会」への申請および承認を受けて実施した。

【実施内容・結果】

インタビュー研究対象者

	性別	年齢	罪名	刑務所ぐらし	シャバ月数	障がい者手帳	介護保険	生保	年金
A	男性	20代	虞犯	1(少年院)	44	精神		○	障害
B	女性	70代	窃盗	1	38	×	×	○	×
C	男性	40代	窃盗	5	58	療育		○	×
D	男性	40代	窃盗	6	41	×		○	×
E	男性	70代	傷害	4	41	×	×	○	×
F	男性	80代	窃盗	7	41	×	×	○	老齢

コロナ禍におけるひとり暮らし調査
【経済面】
最低限の経済的基盤があった
・生活保護、老齢年金と被爆者手当などで収入の変動はない (A) (C) (D) (F)
給付金や救済措置を利用できた
・公共料金の支払いが遅れていた状況を救済措置で助かった (A)
・コロナ関連の給付金で生活環境が潤った (A) (D)
収入減した
・職場休止で就労収入が減した (D)
【生活面】
食生活は維持できていた
・外食できずとも自炊で食事に困らなかった (B)
・買い物は行けていた (A) (F)
・生協など宅配サービスを利用 (A) (D)

医療機関へ通院状況に個人差が生じた
・ コロナ禍では通院ができなかった (A)
・ 医療機関とのつながりも絶やすことないようにした (F)
コロナ禍特有のトラブルや生活不安を抱えた
・ 誰もが家で過ごすことが増え、隣人と騒音トラブルに発展した (A)
・ コロナ感染予防に敏感な人から避けられるようになった (B)
・ 基礎疾患があるので公共の場や混雑を避けた。(E)
・ 感染を恐れて、部屋の中でもマスクを外さず、加熱調理して予防した (E)
・ ウォーキングをして体力づくりをした (B)
・ あえていつも通りの生活を心がけた (B)
・ 3密を避けて自転車移動 (F)
・ 政府が言う通りに生活すれば安心だと思った (F)
・ 偶然遭遇した炊き出しに集まる困窮者を見て不安を煽られた (F)
・ コロナ禍のなか友人の死を体験した (F)
【就労面】
就労状況に変化なかった
・ コロナ禍でもアスベストの仕事には就けた (C)
就労状況に変化があった
・ コロナで仕事やボランティアが減する (D) (F)
・ 職場で陽性者が出て、濃厚接触者となり自宅待機を強いられた (F)
・ コロナ禍ゆえの仕事が増えた (D)
【対人関係】
フォーマルな支えがあった
・ 1日2回、自宅への見守り訪問してもらえた (B)
・ 訪問看護が来てくれていた (A)
・ 支援者による金銭管理で安定した (D)
インフォーマルな支えがあった
・ 近所や同じアパートの人と挨拶など交流を継続できた。(B) (E)
・ 文通継続した (B)
・ 交際相手もいるので孤独感はない。(C) (E)
・ 身近な飲食店の存在 (A)
・ Youtube の視聴者から励まされた (A)
・ SNS の利用で新しい繋がりや再会した知人に支えられる (A) (D)
・ 収穫物 (野菜) やおかずのやりとりするコミュニティがあった (B) (F)
家族関係による影響を受けた

・コロナを機会に家族も鬱状態になった (A)
・家族ができないことが自分に回ってきてさらにしんどくなった (A)
・コロナ感染流行をきっかけに、娘との関係性修復につながった (F)
・疎遠だった妻の近況を知った (F)
・迷惑をかけた家族に対し援助できる機会を得た (F)
【趣味】
中断または活動が縮小した
・地域のクラブ活動が中止 (B) (F)
・趣味のプレイグラウンドが休業したため、できなくなった (A)
・コロナの影響で趣味のパチンコをやめることができた (E)
・やれることが限定して退屈 (F)
・やりたいこととの葛藤 (F)
・感染防止のルールで思う存分楽しめない (D)
楽しめる形を発見した
・趣味を扱うお店は空いていた (A)
・家の中でも楽しめる趣味 (ナンクロや読書) があった (B) (E)
・オンラインでの楽しみ方に変わった (D)
・自転車での散歩に切り替えた (F)
【その他】
施設生活と比較して
・ひとりぐらしであれば自分の身を自分で守れるが、施設はそうはいかない (B)
・集団でいても寂しい人もいれば、一人でも幸せな人もいる (B)
刑務所ぐらしを俯瞰して
・刑務所で独房にいるのとひとりぐらしでは訳が違う (B)
・出所を機にお酒とギャンブルを辞めたお陰で、自粛生活でも苦にならなかった (E)
・コロナの感染拡大に際し、改めて畳の上で死にたいと思う (F)

【考察】

矯正施設退所者である研究対象者は刑務所ぐらしに比して、非常事態であるコロナ禍の生活をポジティブに受けとめ、また、たとえコロナ感染で命を絶ったとすれば塀の中ではなく畳の上で最期を迎えたいと立ち直りの意思を強くした。自由を束縛された期間がある彼らだからこそ、この不自由な社会を大きく崩れることなく乗り越えていた点は、本研究の特徴的な示唆だと言えよう。その他、コロナ禍特有のトラブルや生活不安を抱えながらも、安定したひとり暮らしを継続することができた要因は3つあると分析した。この結果は、独居高齢者やひとり親、ひきこもり支援などにも応用できるのではないかと考える。

① 最低限の経済的基盤が整っていた(公助)

地域生活定着支援センターでは、出所時に活用できる年金等の受給支援を行う一方で、高齢や障害を理由に一定の収入が見込めない場合は生活保護申請を勧めることも多い。そのため、保護費受給による経済的保障の確保や支援者による金銭管理により、たとえコロナ禍で就労が不安定であっても生活の揺るぎは最小限に抑えることができていた。

② キーパーソンになる支援者やアウトリーチによる支援者に支えられた(公助)

本人の福祉的ニーズを見立てて障害や介護サービスに繋げ構築した支援体制は、たとえコロナ感染のように未曾有の非常事態に陥っても、彼らの生活を支えることができていた。

③ 自ら構築した関係性や生きがいに支えられた(自助・共助)

ひとりぐらしの生活を深掘りするために実施した施設ぐらし調査から、ひとりぐらしの対象者は支援者一被支援者の関係性だけにとどまらず、彼らが主体的に発見した生きがいや、構築した新たな対人関係、またそれらに支えられることによって、コロナ禍においても精神的な孤立に至らず生活の質を維持できていることが示唆された。

【今後の課題】

「食べないと死んでしまう」などと他者が納得できる理由を伴わなければ、人目を恐れて買い物さえ不自由を強いられる社会事情が潜在する昨今、今回のインタビュー研究協力者のなかでも、感染を恐れるあまり他者との交流を最小限にしようと画策する人がいる一方、一般的な対策をして行動すれば大丈夫と楽観的な考えを持つ人がいたのは事実である。コロナ禍に対する受けとめ方や予防意識に個人差が生じることで、価値観の異なる人を排除し、また自ら孤立を求めるようになるなど、今後対人関係に距離が生まれコミュニティさえ分断されることが懸念された。コロナ禍が長期化すれば両者の溝が浮き彫りになり、上記の考察にも様々な変容が起こりうるであろうと推測する。これからも縦断的に調査することで分析および考察を深めたい。

【経費使途明細】

使 途	金 額
研究対象者への交通費+謝金 (6人)	30,000円
テープ起こし委託費 (6件)	60,000円
ウェビナーゲストスピーカー謝礼 (8人)	30,000円
ZOOM 利用料 (5ヶ月分)	11,000円
記録機材等購入費	71,000円
ウェビナーチラシ作成及び報告書作成費 (振込手数料含む)	30,120円
結果報告書作成費	30,000円
合 計	262,120円
大同生命厚生事業団助成金	300,000円